慶留間島の西海岸（座間味村）

沖縄歴史の散歩道 vol.21

◆古民家を巡る②

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。

伝統的な建物は沖縄本島以外にも見ることができます。沖縄本島の西側に浮かぶ慶良間諸島。そのなかの慶留間島には高良家住宅という古民家があります。明治初年に建てられたこの住宅は王国時代の末期、琉球の進貢船で船頭をつとめた仲村渠親雲上が得た貿易の利益を資金として建てたとされ、「船頭主家」との別名もあります。赤瓦葺きの木造建物（当初は茅葺き）に石積みをめぐらせ、ヒンプンも設置してある豪華な建物です。台所が母屋と一体化している構造で、当時一般的だった台所を別棟にする方式とは異なります。建設に際しては、大宜味村から大工16人が来島し工事にあたったと言います。

小さな離島に豪邸を建てられた大きな契機が、海外貿易による利益です。王国時代、慶良間諸島は船乗りを多く輩出し、琉球の中国貿易にも参加していました。貿易に参加するとボーナスとして個人で貿易をする権利が与えられ、多くの品物を中国からもたらすことができました。中国貿易の利益は俗に「唐一倍（つまり倍の利益）」とも呼ばれ、仲村渠親雲上はそうした富をもとに住宅を建てたのです。なお高良家は大正時代にはカツオ漁でも儲け、増改築を経て現在の姿となっています。

琉球の中国貿易には慶良間諸島だけでなく、久高島などの離島の人々が船員として参加していました。これらの島々は沖縄本島周辺の海運業にも従事していて、琉球王府は航海のプロを中国への貿易船にも採用していたわけです。中国福建省にある琉球人墓地には渡嘉敷島や慶留間島の船員の墓碑がこれまで確認されています。確認された108基の墓碑のうち、実に10基は慶良間諸島出身者の墓です。それだけ慶良間諸島の船員たちが海外貿易に深く関与していたことを示しています。

当時の海外渡航は命がけの旅で、難破や病死などさまざまな危険がありました。慶良間諸島の船員たちは大きなリスクを負いながら航海に従事していました。高良家住宅と琉球人墓地の2つの場所は、大成功を収めて帰島した人と、志半ばで無念にも異国の地で倒れた人々の対比的な姿が象徴的に示されていると言えます。

高良家（座間味村）

高良家の石積み（座間味村）

琉球人墓地（中国 福建省）

上里 隆史
（うえざと・たかし）

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ボーダーインク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「ブラタモリ」案内人などメディアでも活躍。